

使者たち

茶色いふわふわの子鴨（こがも）、休まない漕ぎ手よ
おまえが日に百キロ動き回れるようになるまで
ここらで一番の小麦と大麦を食べさせてやろう
だから

一条の日光のように棲み家から逃げ出したあの男を
水中も地上も空からも探しに行け

何でも見たがる縞りす、素早い走り手
五週間毎日おまえの頬袋が十度ふくれるほど
どんぐりと胡桃とはしばみの実を持ってきてやろう
だから

壇（びん）洗いのブラシのような尻尾にわたしのルビーの指輪を
さして

あの男のもとへ走れ 運命を聞かせに

緑にぬめる殿様蛙 ちいさな哲学者

おまえを蛇からも鳥からもこどもたちからも護（まも）ってやろ
う

ぶんぶん飛び回るおいしい小虫と結婚相手も連れてこよう
だから

北の森の紫きので操って

びよんびよんわたしのもとへあの男を連れておいで

たおやかな青鷺（あおさぎ）、長い嘴（くちばし）の狩人よ
丸々肥った魚と田螺（たにし）とざりがにの沼へおまえを案内し
よう

だから彼の首の動脈をまちがいなく突き刺しておくれ
からだ中の血が頭からわたしにふりかかるように

黒光りする飢え鴉、生まれながらの屍肉（しにく）喰い
とびきりの晩餐におまえを招待しよう

彼の屍（しかばね）を眼玉から爪先までつつき喰らうがいい
けれどしなやかにきらめく髪と白い大腿骨だけは残しておくれ
わたしが両の腕（かいな）に抱いて眠り

彼の赤子を孕（はら）めるように